

●二人で味わう古典和歌 (122)

薄墨うすずみにつくれる眉のそば顔をよくよく見れば帝みかどなりけり

細川幽齋

三稜みかど(三角)の形をした蕎麦のような薄墨色に作った眉の横顔をよくよく見てみるとそれは帝であった。

作者は細川幽齋ゆうざい。歌学の秘伝を伝授した「古今伝授」で有名な武将である。掲出の狂歌は蕎麦粉を練って作った蕎麦搔餅かきもちが出された場で詠んだ作とされる。「帝」は主人であった豊臣秀吉。蕎麦搔きを好んだ秀吉の御前で披露したという説もある。

「眉をつくる」とは「眉を描く」の意。当時の公家は眉を抜いたり刺つたりしたあと、殿上眉てんじょうまゆと呼ばれる長円形の眉を薄墨で描いていた。本来の眉よりも高い位置に描くことで表情が変わっても眉が動かず高貴な印象の無表情を保つことができたという。そして「そば顔」とは側面からの顔を指す「横顔」の意。眉と蕎麦搔きのどちらも薄墨色であることから蕎麦と「そば」を掛けているのだ。さら

に蕎麦の実みかどは三稜(三角)の形をしていることから「帝」を掛けている。ここでの帝は天皇ではなく、天下を治める主君を指すのだろう。

それにしても主君相手への「よくよく見れば」の距離感におどろく。よほどの信頼関係がないといくら狂歌といえど面白がっているのか迷いそうな馴れ馴れしさだ。一方で「薄墨」「眉」「見れば」「帝」とマ行の音があかるく柔らかくひびく音感、その場を和ませたのではないかとも想像する。目の前に出された温かい蕎麦搔餅と天下を我が物とする秀吉の顔とが即興の一首によってオーバーラップするおかしさが、幽齋その人の魅力にも繋がっているような気もしてくる。優れた政治感覚を発揮した武将であるだけでなく、和歌や茶、能にも精通する武家文化人であった幽齋。織田信長、秀吉、徳川家康と次々に主人を変えながら戦国の乱世を生き抜くことができたのも伝統を学び、尊ぶ真面目さと軽やかなユーモアのバランス感覚だったのではないだろうか。場を和ませることのできる人はいつの世も好かれる。『古今夷曲集』収載。

(小島なお)

